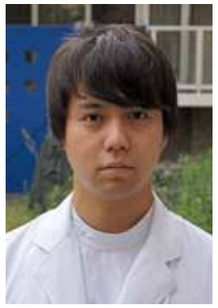
最先端の治療と未来志向の研究で臨床の現場を支える研究室

大学院ヘルスバイオサイエンス研究部
再生修復医歯学部門 生体防御腫瘍医学講座
胸部・内分泌・腫瘍外科学分野（医学系）



医学部 医学科 6年
原田 哲嗣（はらだ てつじ）

丹黒章（たんどくあきら）教授を中心とする胸部・内分泌・腫瘍外科学分野では、臨床と研究をリンクできるという外科のメリットを生かしながら、年間50例を超える食道がんの治療や、年間１００例を超える乳癌手術をこなし、また甲状腺手術も年々増えています。肺がんの治療では、現在主流となっている胸腔鏡を使用する高度な手術をてがけています。

特に乳癌では放射性同位元素を使用しないセンチネルリンパ節同定法の開発に着手（これはがん細胞が最初に転移する〝見張りリンパ節〟を見つけ出そうというもの）し、臨床に活用、現在は肺癌にも応用し研究中です。

このように単に胸部といっても、幅広い範囲の手術や研究に取り組まなければなりません。

臨床にフィードバックできる研究を

近年めまぐるしく進歩する医療分野においては、患者の治療だけでなく、新たな研究、新たな発見と新技術の開発によって未来の医療をプロデュースしていくことが求められます。

人を育てることが名医を育てる

研究室は学生を立派な外科医として育て、送り出していく重要な使命も担っています。そのために自由な発想で研究できる場にしています。

研究室の理念は「自由闊達」。若手医師や学生の意見も取り入れながら、常に新しい考え方で進むのが方針です。

医学部医学科の学生は、研究室で1年間を学ぶ研究室配属（3年生）、2ヶ月の臨床体験実習（5年生）、担当医とともに現場で学ぶ臨床実習（5～6年生）と、研究、経験、実践を学生のうちに学び、それに加えて現場で患者さんの心と向かい合うことも身につけていきます。

原田さんも3年生の時には、食道ガンの手術前に栄養補助食品で栄養の管理をすることで合併症にどのような影響が出るかという研究に取り組みました。5年生の時には実習で徳島の日赤病院をはじめ、沖縄や香川県の病院で経験を積んできました。

現在は臨床実習を行いながら、先輩たちから医師・研究者としてのあり方を学び、将来の道を探りつつ立派な医師になることを目指しています。

和気あいあいとした雰囲気の中で

他学部の研究室と違って、医学部では同じメンバーで研究室の中で作業するということはありません。それだけに丹黒先生を始め他の先生方も学生とのコミュニケーションを大切にしています。

いくつもの現場を抱える忙しい中で時間を工夫しながら、飲み会やバーベキューなどのイベントも。

「丹黒先生はあこがれの存在でしたが、かといって近寄りがたいような方ではなく、優しく積極的に指導もしてくださいます。他の先生や先輩方も面倒見が良く、研究にもやりがいが持てるところです。」と、原田さん。

臨床に直接フィードバックできる研究を行いながら、国内外への留学生も多数送り出すなど、将来の外科分野を担う人材を育てる研究室です。未知の真理を模索しつつ、質の高いリサーチを行いながら、未来の医療を形にすることを目標に修練しています。